

# ソウル特別市カンドン区立図書館の取り組み

## — 特色あるテーマを持つ図書館活動 —

Activities of the Gangdong-gu Public Library, Seoul

— Focus on Specialized Thematic Programs —

村主千賀\*

Chika MURANUSHI

キーワード：ソウル特別市 カンドン区 公共図書館 差異化

Key Word : Seoul Special Metropolitan, Gangdong-gu Public Library differentiated services

### 要約

本研究では、大韓民国ソウル特別市にあるカンドン区立図書館に注目し、「特性化」という独自の運営方針のもとに展開される多様なサービスや先進的な試みについて現地調査とインタビューを行った。「特性化」により、サービスの方向性を明確化、利用者とのつながりの強化、場としての図書館の在り方を明確に意識したサービス空間の創出、ダイナミックな図書館活動の展開が可能となっていることが判明した。日本の公共図書館において効果的なサービスの実施のために参考にできる事例を示し、その実施に向けた提案を行った。

### Abstract

This study examines the Gangdong District Public Library in Seoul, Republic of Korea, focusing on the diverse services and innovative initiatives developed under its distinctive operational policy of “specialization.” Based on on-site observations and interviews in 2024–2025, the study reveals that this policy has enabled the clarification of service direction, strengthened relationships with users, the creation of service spaces that consciously emphasize the library’s role as a place, and the dynamic expansion of library activities. Drawing on these findings, the paper presents case examples that may serve as useful references for the implementation of effective services in Japanese public libraries and offers practical recommendations for their adoption.

---

\* 東海学園大学人文学部人文学科

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

本研究では、大韓民国（以下韓国）における公共図書館のうち、ソウル特別市カンドン区立の公共図書館に焦点をあてる。

韓国の図書館は、図書館法<sup>1)</sup>において設立と運用主体によって国立、公立、私立に区分される（4条の1）。一方、設立目的と対象によって公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門図書館、特殊図書館に区分される（4条の2）。このうち公共図書館とは、“公衆の情報利用・読書活動・文化活動・および生涯学習を主たる目的とするもの”であり「小さな図書館」<sup>2)</sup>や、児童・障害者・高齢者、多文化家族を対象とする図書館サービスを目的とする図書館も含むと規定されている。統計上の区分では、教育庁図書館（広域自治体設立）、自治体図書館（区、市、郡）、私立図書館が公共図書館に含まれる<sup>3)</sup>。2024年の統計では自治体図書館は全国で1034館ある。

ソウル市特別市（以下、ソウル市）は大韓民国の首都であり行政区域としては唯一の特別市である。その下位行政区域として25の自治区がある。市内にはソウル市教育庁が管轄するソウル市立図書館と、各自治区が運営する区立図書館（自治体図書館）がある。

本研究は、ソウル市の自治区の一つである강동구（カンドン区、以下カンドン区とする）の公共図書館に着目する。韓国においては図書館法改正の2000年以降、特に2006年を起点として全国的に図書館活動や読書振興運動などが活発化したが（金 2007）、中でもカンドン区立図書館は、2007年のソネ図書館開館以来、韓国図書館界において図書館運営について受賞歴があり、評価されてきたことが本研究で注目する理由である<sup>4)</sup>。それに加え2014～2015年に区立アムサ図書館で保護猫活動が行われた事例や、2025年に相次いで開館した2館が話題となるなど、ユニークな図書館があるためである。なお、カンドン区には本研究で対象とする区立図書館の他に、ソウル市教育庁の設置する公共図書館（教育庁図書館）として、キル洞にソウル市立カンドン図書館、コドク洞にソウル市立コドク生涯学習センターがある。「洞」とは、自治区の下位の行政区域である。

カンドン区は人口503,987人<sup>5)</sup>で、ソンパ区、カンナム区、カンソ区について第4位の人口規模であり、地理的には漢南市、九里市に隣接し、市中心部から見て東南部の郊外に位置する。ソウル市は東京都と面積、人口において似通っていると指摘され、東京23区に喩えられることがある。吉村はカンドン区について葛飾区や足立区北千住あたりに該当すると述べている（吉村 2021）。

カンドン区は高層マンション群の新規開発が行われる一方で、伝統的な商店街（시장シジャン・生鮮食品や衣類を扱う卸売および小売店が集まる）が併存する、ソウル市内における典型的な自治体である。

### 1.2 研究の目的と方法

本研究では、滞在型サービスの観点からカンドン区立図書館の先進的な設備や建築を調査し、

多様なサービスや事業について現状と特徴を考察し、それを通じて他の公共図書館へ導入することが有効な点を見出すことを目的とする。

現地調査および関係者へのインタビューを中心とし、図書館の各種の案内リーフレットや図書館が提供するグッズ等を収集した。また公式 Web サイトや文献・資料からも情報を収集した。区立図書館 8 館のうち、現地調査を行った 5 館とブックカフェ図書館<sup>6)</sup> 1 館についての調査結果について報告する。現地調査は以下のように行った。

- 2024 年 2 月 암사도서관 (アムサ図書館) インタビュー
- 2025 年 2 月 둔촌도서관 (ドゥンチョン図書館) 見学とインタビュー
  - 3 月 성내도서관 (ソンネ図書館) 見学とインタビュー
  - 북카페도서관 다독다독암사총합시장점 見学  
(ブックカフェ図書館多読茶篤 (タドクタドク) アムサ総合市場店)
  - 7 月 강동숲속도서관 (カンドンスブソク図書館) 調査の下見・資料収集
  - 다운촌도서관再訪 \*主に全館共通イベントについての情報収集
  - 9 月 중앙도서관 (中央図書館) 調査の下見・資料収集
  - 카동스브소크도서관 見学・インタビュー
  - 中央図書館 見学・インタビュー

アムサ図書館では、後述する絵本(斗他 2016)に描かれた保護猫活動、それにまつわる図書館サービスの展開に関してインタビューを行った。保護猫活動に対する社会の反響については、Web 検索によって当時の新聞記事やテレビ番組紹介などから情報収集し、事前に質問内容を送信した。また、公式 Web サイトに見られるカンドン区立図書館のサービスについて、独自性のある活動についてもあわせてインタビューを行った。インタビューには区立図書館運営を担当する강동문화재단(カンドン文化財団)<sup>7)</sup>の図書館チームの A チーム長と、2024 年時点のアムサ図書館館長(後に文化財団図書館チーム/責任<sup>8)</sup>) B 氏が応じた。

次にドゥンチョン図書館、ソンネ図書館を調査した。筆者の「場としての図書館」に関する研究(村主 2023)に関連した見学ポイントから A チーム長に照会し、2 館が推薦された。調査の対応についてはそれぞれの図書館長が応じた。この 2 館の「特性化」(後述)に基づいたサービスと、建築上の特徴、各種イベントやプログラムの成果と展示、館内の説明を受けた。その際、2025 年度に新たにカンドンスブソク図書館(スブソク図書館とは森の中の図書館の意味)と中央図書館の 2 館が開館するとのことであった。

カンドンスブソク図書館と中央図書館は、Web 調査と下見により情報収集、事前に質問を送信し、現地調査をおこなった。カンドンスブソク図書館は前述の A チーム長から、事前質問に対す

る回答と、館内見学において補完的な情報に加え、館内に展開するサービスや施設について情報を得た。

中央図書館では前述のB氏がインタビューに応じた。カンドンスプソク図書館同様に、館内見学によってインタビュー内容を補完する情報と、事前調査で不明であった図書館のサービスの細部に関する情報を得た。

## 2. カンドン区立図書館の特徴

### 2.1 区全体の図書館の構成

カンドン区は「本のあるカンドン区」を標榜し毎年盛大なブックフェアを開催するなど図書館活動が盛んな自治区である。カンドン区立図書館はカンドン文化財団により委託運営されている。同財団は2020年に文化芸術事業と図書館運営を行う財団法人としてカンドン区により設立された<sup>7)</sup>。したがって、区立図書館の運営は委託事業であり、図書館業務に従事する司書は専任であっても公務員ではない<sup>3)</sup>。財団の運営および事業に必要な財源は、区の拠出金、財団事業の利益、寄附金およびその他の収入で賄われる。

カンドン区は、法定洞として강일동(カンイル洞)、상일동(サンイル洞)、고덕동(コドク洞)、명일동(ミョンイル洞)、암사동(アムサ洞)、천호동(チョノ洞)、성내동(ソンネ洞)、길동(キル洞)、둔촌동(ドンチョン洞)の9つの洞からなる。現在中央館と、地域の中心となる一般的な図書館(統計上の区分で「本館」扱い、以下「区立図書館」)を合わせた8館と、「小さな図書館」18館、ブックカフェ図書館6館から構成されている。その他に私立の「小さな図書館」が24館ある(執筆時点)。区立図書館は特定の曜日に全館が休館するわけではなく、休館日は月曜と火曜に分散しているため、法定公休日(国家が法的に定める公休日・日本における国民の祝日にあたる-)を除いて、区内の複数の図書館が必ず開館している。また成人向けには午後10時まで開館する図書館もある。

前述した本館扱いの区立図書館が全洞に所在あるわけではなく、コドク洞、キル洞、ミョンイル洞には設置されていない。しかしコドク洞にはソウル市教育庁の設置するコドク生涯学習センターが設置されるほか、「小さな図書館」が2館、私立の「小さな図書館」が3館、ブックカフェ図書館1館の他、24時間貸出システム1台がコドク駅に設置されている。キル洞にはソウル市立カンドン図書館と、ブックカフェ図書館1館、「小さな図書館」1館、私立の「小さな図書館」3館がある。キル洞には隣接するソンネ洞にソンネ図書館、ドンチョン洞にドンチョン図書館があり、市立カンドン図書館からは自動車では10分以内の距離であるが、公共交通機関の利用者にとっては、路線も駅も異なる位置関係にある。ミョンイル洞の場合、「小さな図書館」1館と未来教育イノベーションセンターに24時間貸出システム1台が設置されているだけであるが、「小さな図書館」からは、隣のサンイル洞にある「カンドンスプソク図書館」が徒歩で20数分、バス

で15分~20分程度の距離になる。このように他の洞の区立図書館がそれほど遠くはなく、また24時間貸出システムにより貸借・返却を地元で行うことができ、大きく利便性を損なわない体制となっている。

カンドン区立図書館（「小さな図書館」、ブックカフェ図書館は除く本館扱いの図書館）は他区には見られない 특성화「特性化」の推進という大きな特徴をもっている。特性化について、区立図書館の統合サイト冒頭<sup>4)</sup>では、「地域住民の 삶（人生・生活）に最も近づくことを目指す、カンドン区立図書館でありたいと考えています。カンドン区立図書館は全部で8つの図書館があり、それぞれの 특성화（特性化：特色を活かすこと）を通してサービスを差別化し、地域住民の日常に価値を付与する地域共同体として成長していきたいと考えています。「超接続の時代」<sup>9)</sup>において、本と人、人と人が互いに繋がる特別な体験を、ぜひカンドン区立図書館でお楽しみください」と述べられている。図書館を、単なる読書支援施設・サービスではなく、地域に溶け込んだ文化システムとして機能させるよう努力を惜しまない姿勢の表明であろう。

## 2.2 특성화 (特性化)

上述のとおり、カンドン区立図書館は 특성화 (特性化) という図書館の運営方針を打ち出し、図書館活動を展開している。특상화 (特性化) とは、各図書館が特定のテーマを持ち (表1)、その分野に重点を置く図書館の在り方を指す言葉として用いられている。「専門化」という語は専

表1 カンドン区立図書館の「特性化」

	특성화 (特性化) 포인트	특성화 (特性化)의 콘셉트
중앙도서관 中央図書館	人文・芸術	인문예술을 기반으로 한 사색과 소통의 복합문화공간이자 강동구 지식문화의 중심이 될 강동중앙도서관 人文・芸術を基盤とし思索と交流の複合文化空間であり区の知識文化の中心
성내도서관 ソネ図書館	絵本	그림책을 위한 메이커스페이스 역할을 견인하는 성내도서관 絵本のための制作スペースの役割を牽引する
해공도서관 ヘゴン図書館	独立出版	독립출판을 통해 건강한 책 생태계를 만들고 있는 해공도서관 独立出版を通じて健全な図書エコシステムを作り出す
강일도서관 カンイル図書館	伴侶生活*	반려생활의 가치를 라이프스타일로 확장하고 있는 강일도서관, 伴侶生活の価値をライフスタイルに拡張する
암사도서관 アムサ図書館	美術	미술을 통해 지역주민의 문화예술 활동을 지원하는 암사도서관 美術を通じて地域住民の文化芸術活動を支援する
천호도서관 チョノ図書館	協同(共同)育兒	공동육아로 도서관의 사회적 가치를 창출하고 있는 천호도서관 共同育兒によって図書館の社会的価値を創出する
둔촌도서관 ドンチョン図書館	読書治癒	독서치유를 통해 마음 회복의 인문가치를 제안하는 둔촌도서관 「読書治癒」を通じて心の回復の人文価値を提案する
숲속도서관 スプソク図書館	科学	과학을 바탕으로 질문하고 상상하는 지식의 숲 강동숲속도서관 科学に根ざし疑問を持ち想像を働かせる場となる知識の森

カンドン区立図書館統合サイト 紹介ページより抜粋・翻訳して作成<sup>4)</sup>

\*伴侶生活とは、愛玩動物を共に生活する家族として暮らすライフスタイルのこと

門図書館をイメージしやすい語であること、漢字訳が可能であるため、ここでは直訳の「特性化」という用語を用いる。

図書館を特性化するには、必ずしも主題専門化するというのではなく、館ごとに重点テーマ、サービスの核とするテーマを持つことである。蔵書構成には他分野の資料も含み一般的な図書館サービスも行う。中央図書館は各館を代表する総合的な立場の中央館として機能しながらも、特性化のテーマを持っている。各図書館が特性を活かして独立して行うプログラムやイベントがある一方で、全館で共通して取り組む事業や、文化財団が運営・支援する事業との連携を行っている。

## 2.3 各図書館の特徴：現地調査の報告

### 2.3.1 암사도서관암사図書館

アマサ図書館は「美術」をテーマとする図書館である。2025年10月現在環境に配慮した建物へリモデリングのため閉館中（2025年7月より12月まで）である。臨時閉館前には「アマサ図書館美術特性化プログラム」として2か月半間にわたり図書館内のホールにて講義を行っていた<sup>10)</sup>。

アマサ図書館はまた絵本『도서관에서 만난 해리』(図書館で出会ったハリー) (斗他 2016) の舞台となった図書館である。この物語はアマサ図書館と保護猫ハリーのエピソードをもとに描かれたフィクションで、アマサ図書館の近所にいた野良猫の図書館による保護活動と、周辺住民や子どもたちの交流のエピソードが基になっている (村主 2019)。

アマサ図書館が行った保護活動に対しては、職員や住民の意見を募りながら行われた。アマサ図書館が行った猫の名前募集イベントでは、ある子どもの「大変なことを克服するハリーポッターのように」という案が採用され「ハリー」と名付けられた。これは子どもの読書から紡ぎ出された命名であると言える。またキャラクター公募展では、採用されたキャラクターのエコバッグ、はがき、葉を作成し、保護猫ハリーと利用者を結びつけていった。応募作はまとめて展示され、投票イベントも行った。ハリーのエピソードをもとに、絵本作成のプログラムが実施され、参加者は独自にハリーのキャラクターを創作し、製本された本は図書館が1冊と作者がそれぞれ数冊持つことになった。一連のイベントは参加型として実施された。それまで減少傾向にあった図書館利用者数は、ハリーの登場でおよそ20%増加した。ハリーは外で負った怪我がもとで、一般市民へ譲渡され図書館を離れたが、その後も利用者が減少することはなかった<sup>11)</sup>。このことから図書館利用習慣が地域に根付いたと考えられる。保護猫活動から派生した絵本作成プログラムやキャラクター展等の住民参加型イベントは、アマサ図書館の「美術」に特性化している強みを活かしたとも言える。また、このような保護猫活動は他では見られない活動であり、アマサ図書館の自律的な活動として評価できる。

### 2.3.2 둔촌도서관ダウンチョン図書館

ダウンチョン図書館の「特性」は치유であり、漢字で表すと「治癒」となる。癒しを得られる、ヒーリング、リフレッシュ、リラックスできる図書館を志向し、案内リーフレットには“癒しの本の森”や“本とともに休んでいく空間”とも表現されることがある。そのコンセプトは、利用者への配布物の随所にも見ることができる。例えば新規利用者（登録者）向けリーフレットには“本が遊びになる図書館、空っぽになったり、満たされたりして、思索する図書館”、“日常の中で孤独感を忘れさせる贈り物のような図書館で、日常の休止符に出会えるように願っています”と記されている。

多様なサービスが実施されるが、中でも目を引くのは特性化に沿った司書によるブックキューレーション<sup>12)</sup>である。一例をあげると、2階には床から手の届くギリギリの高さまでの大規模な展示型書架があり、推薦図書が展開される。見学時には、書架案内に「休みが必要な時、治癒の書齋」とあり、書架番号はH(HEALING)と表記されていた。また、当該書架の一角を利用した掲示があり、今後のキューレーションのテーマの候補をリストし、利用者の投票（丸シールを貼る形式）を行っていた。これは、どのようなテーマが求められているかを探るためのもので、担当する司書が利用者との「対話」を重視した企画である。このフロアのコンセプトは치유오솔길(癒しの寄り道)で、書架を散歩することで癒される思索空間として、主に青少年と成人向けの資料室となっている。

館内には数か所に展示書架があり、それぞれ展示によって1か月毎、2か月毎に入れ替えが行われる。展示後は一般書架で見つけられるように、ブックラベルとは別に図書の背に色テープで識別できるようになっている。

紹介されたサービスのうち興味深いのはデジタルデトックスのイベントであった。それは携帯・持参する一切のデジタル媒体を図書館に預け、一定時間読書に集中して過ごすというものである。自由掲示板には、利用者が自主的に貼った「その時間でどこまでどの本を読んだか」というメモが残されていた。当初試験的な試みであったが、好評を得て利用者から開催のリクエストが集まったとのことである。なお、デジタルデトックスというコンセプトは、後に開館した中央図書館においてもデジタルデトックスゾーンの指定という形で実施されている。

図書館建築の構造や図書館家具についても注目すべき点がいくつかある。建物は4層からなり、4階にあたる場所には屋外に庭園が設けられ、大型のブランコでくつろぎ、読書することもできる。屋外の階段を利用し3階のテラスへ降りると、テラスはガラス壁に囲まれた開放的なホールのある空間へと連結している。ホールは人々が集うことができるコミュニティ室の役割を持つ。またブックギャラリーエリアは静かな音楽が流れ、成人の利用者が落ち着いて利用できる空間であった。

対して1階は子ども・幼児を対象とする空間であり，치유놀이터（ヒーリングの遊び場）として様々な工夫がこらされていた。人形やぬいぐるみのディスプレイ，寝転がって読書ができる場所では，IKEA で選んだという大型クッションが設置されていた。日本では図書館家具や図書館専用の什器を扱う専門業者があるが，そのようなところはないとのことであった。なお，IKEA のソウル市内への初出店がカンドン区であり，他のカンドン区立図書館でも IKEA 家具が利用されている。

空間デザインにおいて，子どもの安全確保という点から注目したのは避難経路を示す表示である。一般的な非常口を示すピクトグラムだけではなく，キャラクター化された消防士が進路を指さす形の案内が，蓄光機能のある素材で子どもの目の高さに描かれていた。保護者と離れている間に，不測の事態が生じて子どもが「光る消防士」に導かれて避難できるようにする工夫である。

さらにドンチョン図書館の大きな特徴は「0 エネルギー建築」を目指す公共施設という点である。館内は一年を通じ23度に維持されている。屋上に設置されたソーラーパネルによる電力の供給と，徹底した断熱建築で外気温の影響をうけにくく，年間を通してほとんど冷暖房を稼働させないなど，エネルギー効率を上げている。その評価として ZEB 4 等級，建築物エネルギー効率等級 1<sup>+++</sup> の認定<sup>13)</sup>を受けている。インタビューによれば，2024 年から 2025 年にかけての冬季の暖房の稼働は零下を記録した数日間のみであった。

### 2.3.3 성내도서관손네도서관

손네図書館は 2007 年にカンドン区立図書館として最初に設置された。2020 年に大規模なリモデリングが実施され，本館と別館で2つの異なる機能を有する図書館である。本館は손네図書館の特性化「絵本」に重点を置き，“絵本を読み，研究し，作る場所”であり，乳幼児，児童サービスを中心に運営されている。別館は“起業と就職に関する幅広い情報を提供する起業・就職の支援の場”をモットーに運営を行っている。

本館は「絵本」をサービスの中心に置いて展開しているが，図書館の玄関口でもあるため，1階が別館の情報も入手できる総合的な空間となっている。またブックキューレーションによる展示を通じて大人も絵本を楽しめる空間でもある。例えば「大人のための絵本」「地域作家の作品」「私も絵本作家」の展示が行われる。絵本特性化プログラム「私も絵本作家」では，子どもを対象にした絵本制作のプログラム参加者による作品群が展示される。それらの作品は図書館の蔵書として閲覧することができるほか，電子図書としても出版され教保文庫オンラインを通じて閲覧が可能である。

本館の2階は乳幼児を対象としている。3階は児童を対象とし，年齢別，主題別の資料提供の他，英語の図書，絵本，点字図書のコーナーなどがある。2階には絵本や図書を読むだけでなく，

触って遊んで文字を覚える器具や人形（たとえば恐竜）、その他のおもちゃなどが置いてある。図書を活用した体験型プログラム<sup>14)</sup>や家具やインテリアによって、心と全身で図書を読み感じる空間構成を目指しているということである。

ソネ図書館における乳幼児（の親）のためのブックスタート支援サービスは、子どもの年齢・発達の段階に応じて選書された絵本が提供される。これは「꼬마 도서관」（直訳は子ども弁当箱）と名付けられたバッグを利用する。提供方法の工夫は、発達の段階ごとに5冊を1袋として5種類（2-3歳）・10種類（4-5歳）・15種類（6-7歳）のセットを準備し、それぞれのセットに番号を付与する。利用者は番号だけを記憶することで重複することなく次の「꼬마 도서관」を選択し、子どもの成長にあわせて、段階を上げていくことができる仕組みである。利用者自身が選書の難しさを感じる事がなく、司書のキューレーションによってブックスタートを開始し、発達に応じた読み聞かせが可能となっている。選ばれた図書（絵本）についての先入観をもつことなく取り組めること、多様な種類の図書に目が向けられるという利点がある。また通常の貸出冊数に含めず提供される。

また、絵本に関する多様なプログラムが提供されている。一例をあげると、「発達障がい児を対象とした絵本教室」では、子どもとその家族を対象として、カンドン区に居住する言語療法士でもある絵本作家が講師を務めた。対象作品（召 2023）の主題は「自分自身に対する信頼・自信によって何事も為せば成る」というもので、作品内容に寄り添いながら子どもの言語の発達の助けになる講演として開催された。

別館は図書館の閲覧室が3階から5階まであり、地下および1・2階はエンジェル工房ハブセンターが入っている。3階の閲覧室は、青少年および成人利用者が主なサービス対象である。起業に関する情報支援、青年の就職支援に重点を置き、専門家の講演やブックキューレーションと読書プログラムの提供などにより、情報拠点となっている。

エンジェル工房ハブセンターの名称は엔젤공방거리（エンジェル工房通り）に由来する。カンドン区がソネ図書館の近接地区の再開発によって青年の職人の工房を誘致し、その地区がエンジェル工房通りと名付けられた。同センターではこれらの工房と地域住民との交流などを通じて手工芸の振興事業を行っている。2023年にカンドン区の社会的経済支援センターと統合されたものである。

ソネ図書館は、これらの各工房や職人と連携し、作品を展示するコーナーを設けるほか、工芸関連のプログラムも実施している。

#### 2.3.4 강동숲속도서관 칸동스브속도서관

スブソク（숲속）とは森の中という意味で、2020年頃より、韓国では特に都市部において、自然と調和する図書館が各所に建てられている。

カンドンスプソク図書館は、2025年5月に開館した。当館の開館に際しては、『내 손안에 서울』の記事では、“スプソク図書館의 끝판왕(ラスボス)が現れた”と表現され、大きな関心と期待が寄せられたことが分かる(임중빈 2025)。その立地条件、規模、蔵書数どれをとっても、ソウル市内のスプソク図書館の中でも群を抜いた存在である。立地は地下鉄駅からは徒歩圏内、またバス停から間近でありながら、図書館自体は森の中に位置し公園に隣接する。自然に恵まれる一方で近隣には高層マンションアパートが林立する区画もあるため、相当数の利用者が見込まれる。

図書館には同一建物内に空間を区別してカフェが併設されている。カフェの公園側に面した窓はオープンファサード形式で、全開時は公園と接続するテラス席となり、開放的な空間を演出している。図書館利用を目的とせずとも、森の遊歩道を散策し訪れることができる。この点について、「武雄図書館をベンチマーク」に据えてみたときの「図書館にもカフェが必要という気付き」が背景にある。以前のインタビューで「ブックカフェ図書館」(後述)に話が及んだ際に、Aチーム長は日本の武雄図書館開館時の驚きとそのコンセプトへの共感、そのような図書館をカンドン区も持たねばと強く感銘を受けたと語った。建築場所はテニスコート跡地の再利用であり公園の隣接地である。そのため図書館は緑地・公園法に準拠する必要から高さ15mに制限されるなど、建築上の課題があった。この制限による「図書館としては天井が低い」点を、吹き抜けを設け開放感を持たせる工夫で克服した。

カンドンスプソク図書館が特別に評価されるのは、その規模・立地条件からだけではない。他のカンドン区立図書館同様に、「特性化」のコンセプトを体現するコレクションの特別性、利用者の核となる青少年に向けた多様なプログラム、ブックキューレーション等、多くの先進的図書館サービスを展開しているためである。「特性化」のテーマは科学である。子ども、青少年をサービス対象の中心に据え、自然科学と技術の両面からサービスを展開している。つまり、科学に重点を置く蔵書構築と、科学に関する各種プログラムにおいて特性化を際立たせている。

科学に特化したプログラムの例としては、隣接する森の自然環境に触れながら、生態系を学び、昆虫や植物観察を行うプログラム、技術という面からはIT企業の協賛するロボットを作るプログラムなどがある。

1階の展示コーナーでは中高生の科学同好会によって、小学生らを対象にブックキューレーション「과학이 궁금한 너에게」(科学が気になる君へ)が展開され、科学を通じた利用者の世代間交流が見られる。低層型展示型書架には推薦図書とコメントのポップが添えられ、利用者同士の「本を通じた交流」の場となっている。

上記のコーナーの背景となる壁面には、天井まで届く高層書架がある。それは韓国を代表する科学者최재천教授(進化生物学・動物行動学)を記念する『과학자 최재천의 서재』(科学者チェジュチョンの書齋)と名付けられた書架である。生物、生命という主題は科学という特性化の大きな柱となるものである。チェ教授の退官に際して、蔵書がカンドンスプソク図書館に受け入れ

られたことから、このような形が実現した。このほか KAIST<sup>15)</sup>の学生から専門知識をもって貢献する才能寄付の申し出があったとのことである。今後子どもたちとの交流や多様な科学特性化プログラムの実践が期待される。このようにこれまで科学を支えてきた科学者と未来を担う科学者とのそれぞれの縁がこの図書館を支える重要な一面でもある。

児童、青少年のための多様な設備も注目に値する。ヤングアダルト層を対象とする映像制作室があり、それぞれ作業別に個室が準備され作画、動画制作、編集機材が設置されている。児童や幼児向けには、描いた絵を即プロジェクタに接続されたPCに取り込み、スクリーンに投影する設備（「拡張現実 めり絵の遊び場」）や、AR 絵本などが準備されている。他に、アイスクリームロボットコーナー、自走式の案内ロボットなどが設置され、最新科学技術を身近に感じることのできる図書館である。

### 2.3.5 中央図書館

中央図書館は、総面積延べ1万2056㎡、蔵書は13万冊におよびソウル市内の自治体図書館としては最大級である。中央図書館から見て大通り（または地下鉄5号線）を挟んで西側が従来からの住民の生活圏であり、従来からの商店街が展開する。一方、通りを挟んで東側は、新しい大規模な高層アパート群が林立する。このような立地の緩やかな傾斜の美しい芝生広場の先に、低層でありながらも威厳ある姿で中央図書館が立っている。スプソク図書館同様に法的な規制に準じて地上の高さに制限がある。芝生広場側からは地上3階建てに見えるが、地下が4層（うち地下3-4階は駐車場）あり、地下2階から地上3階で階数は5となる大規模な図書館である。地上部分は、広さ・高さを感じるように1階から3階まで吹抜けの空間がる。

地下2階には、大規模な多目的ホールやギャラリー（열린미술관「開かれた美術館」）がある。ギャラリーでは、障害を持った人が美術の才能を発揮して制作した作品群が展示されていた。作者の中には国立現代美術館に収蔵される作家も含まれている。作家たちが講師となった講演会は好評を得ている。多目的ホールではオーケストラによるコンサートなども可能である。また、마담뎀「風の場」と呼ばれる中庭がある。

地下1階は多様な目的の集会在可能な部屋（배운곳「学びの場」）と24時間貸出システムがあり、芝生公園側からは1階と同様の感覚で入口へアクセスできる。

1階にはとピアノが設置される상상곳「想像の場」と併設のカフェがある。想像の場では演奏会も開催され、今後は演奏を希望する利用者の申請を受け付けるようにもすることである。また区民の寄贈図書も展示されている。この1階は3階までの吹抜けとなっており、窓は大きく屋外が見渡せるガラス張りの開放的な空間である。この空間を2階から3階をつなぐ螺旋階段が横切るように張り出している。

吹き抜け空間を除く1階部分は子どもたちを対象としたサービス空間となっており、授乳室が

隣接する乳幼児資料室と児童資料室がある。また児童サービスの中でもとりわけ大きな特徴を持つのは어린이작업실 모야「子ども作業室モヤ」である。「モヤ」は図書文化財団シア<sup>16)</sup>が企画する知育のための空間で、中央図書館によって運営される。子どもが想像した物を、自分の手で直接操作ができるように、豊富な材料や部品を提供し、加工のための道具・工具を司書の指導の下で自由に使うことができる。利用時間が決められているが、子ども自身が利用予約できるなど、自主性も重んじられている。保護者向けリーフレットには、“作品の完成を要求せず自主性に任せよう”という呼びかけがなされ、子どもたちだけが入ることのできる空間である。

2階の閲覧コーナーには、仕切りのない音楽聴取コーナーがあり、アナログLPとCDのコレクションが配架され、プレイヤーが備えられヘッドフォンによって利用可能である。これらは自由に利用できるが、利用の公平性のために、予約制または時間制限を今後の検討事項としている。レコードは担当する司書のキューレーションによって配架される。訪問時には村上春樹の作品や記事における音楽関連の言葉をポップに引用していた。今後2か月に1回ほどの頻度で展示替えを予定している。

音楽という点では、館内には静かに音楽が流れているが、それは会話や騒音と感ずる音を打ち消す効果が期待されるものである。

またデジタルデトックス空間も準備されている。そこはドアのある個室ではないが、開放的な閲覧室とは書架を挟んで分けられた空間になっており、静寂が保たれる。閲覧用としては国内一の大きさを誇るという天板の長さ全18mのテーブル（同時に36名着席可能）が設置されている。デジタルデトックスゾーンの案内には“デジタルデバイスを置いて本に集中すること”と表記されている。

中央図書館は、カンドン区立図書館を代表する図書館である一方、他の区立図書館同様に「特性」を持つ図書館である。中央図書館でありながら図書分類上のGeneral（総記）という総合的な意味での位置づけとせず、人文学・芸術に特化している。あえてこのような「特性化」を方針とした理由について、筆者の持っていた本図書館に対する考えと、B責任へのインタビューを通じて理解を整理した。そして人の行動、心の豊かさや、精神的なよりどころは「人文学と芸術」にあり、学術の親である哲学をも含む主題こそ、包括的であるという理解で間違いはないかとB責任に確認したところ、その理解で相違ないとのことであった。

芸術的な資料提供としては、国内外の貴重な画集、展覧会の図録を展示するコーナーがあり、そこでは資料保護のため使い捨てゴム手袋が用意されていた。資料の性質上、ほとんどが大型本であるが、取り扱い易い低層の展示用書架であり、書架の天板は閲覧に適した高さで広さである。また、貴重書展示についても、司書に声をかければ、手袋着用で展示ケースから出して直接閲覧が可能とのことであった。

## 2.4 ブックカフェ図書館：多読茶館

ブックカフェ図書館としては암사시장점（アムサ市場店）を訪れた。ブックカフェ図書館は「図書館にもカフェが必要」という考えから設置されるようになったが、本施設はいわゆるカフェではなく、有料のセルフ式カフェマシーンを持参するタンブラーで利用する形式であった。立地としては伝統市場と呼ばれる商店街に隣接し、病院などが入居するビルの上階に設置された図書室であった。このほかの区内のブックカフェ図書館も施設名としては「〇〇店」と表記されるが、同様にあくまで図書館施設として機能している。

## 3. カンドン区立図書館のサービスを支えるもの

### 3.1 司書の自発的なアイデアを活かす土壌

現地調査したカンドン区立図書館に共通して言えることは、司書によるブックキューレーションの充実である。具体的には各図書館の「特性化」方針に準じて定期的に入れ替えを行い、展示用書架をはじめ固定の書架の一部を活用し提供している。そうしたブックキューレーションを維持し展開していくためには、司書は相当の能力を持ち、かつ努力していると見受けられる。加えて、各図書館では実に多くのイベント、プログラム（特性化に準じたものと読書・文化プログラムがある）が開催されている。図書館の開館スケジュールを確認すると、開館日にはほぼ毎日何かしらのイベントやプログラムが置かれている。また公式 Web サイト以外に、各種のリーフレットが配布されており、SNS (Instagram, Facebook) によっても発信される。プログラムの企画については司書が自発的・自主的にアイデアを出し、可能性を探って実践しているとの回答であった。

また、司書が専門性を発揮し自律的に活動できるのは、司書の地位が尊重されているからである。韓国において司書資格は図書館法<sup>1)</sup>で定められており、図書館情報学専門の学部課程以上を卒業（修了）した者であるが、一般に司書は「先生」と敬意をもって呼ばれる。気軽な雰囲気のあるブックカフェにおいても、司書の呼称に関する注意書きがある。館内掲示物には、職員の呼称について“선생님 (先生様)”とし、“저기요 (ちょっと)”や“언니 (おねえさん)”の文字の上から赤字で×が記されている。司書は女性が多いため「お手伝いのおねえさん」ではなく、専門的な有資格者であると強調しているわけである。なお全館 30 代から 40 代の女性が館長を務めている。それらを統括しまとめている文化財団図書館チームの A チーム長も女性である。カンドン区の図書館は女性の活躍する場でもある。施設面でも女性の視点が活かされ、広々とした授乳室に充実した備品（授乳に適した専用の椅子と補助クッション、ミルク用給湯機）が準備され、来館イベント「お父さんと来る日」の設定がある。

ちなみに筆者が見学中気になった点は、館内においてポータブルゲーム機で遊ぶ子どもらであるが、それについて「そのまま自由にさせておいて大丈夫です、飽きて本を読むんですよ」と寛

容な姿勢であった。また、中央図書館においては図書館に似合うアロマ、フレグランスを企業と協働して提案するブースを展開していた。

### 3.2 地域とのつながり

#### 3.2.1 企業の参画・協力・協賛

カンドン区立図書館は企業からの協賛を柔軟に受け入れている。例えば、カンドンスブソク図書館では、建物の吹抜けに面したテラスに各階で雰囲気の異なる椅子・テーブル・パラソルなどが設置されている。それらはすべて IKEA から提供を受けたものである。IKEA はカンドン区にソウル市内初出店を行ったという地域的な縁もあり、デザインなども IKEA のアイデアに任せて設置している。他にも、中央図書館において IKEA が協賛した調度品などが設置されていた。また、カンドンスブソク図書館では、民間教育機関である LG ディスカバリーラボとカンドン文化財団の業務提携により、全国の図書館として初めて、人工知能ロボット『キューブレット (Cubelet)』体験プログラムを正式プログラムとした。これは LG ディスカバリーラボが AI を活用したロボット体験教育を地域の公共図書館で継続的に提供する初めての事例である。

#### 3.2.2 本に関わる人々への支援事業：事例잇북人강동 It Book in Gandong

『잇북人강동』は、カンドン区の図書文化エコシステムを醸成する事業のブランドとして 2025 年 7 月より実施された。“잇”はつなぎ合わせる、結ぶという意味の語で発音は英語の it と近い音である。“북”は book の韓国語音訳である。“잇북(It Book)”とは、本でつながることを意味し、“人”の音は in と同じで、その中心にある人の存在を表している。この『잇북人강동』をデザインしたブランドロゴを掲げて、区立図書館を中心に、区に在住する作家、書店、出版者と読者がつながり合う機会を創出する事業が展開された。

各図書館において、作家は来館者向けに作品展示とその解説を行い、社会貢献プログラムに参加する。図書館は区内にある個人経営の小規模独立書店を紹介、書店におけるブックトーク、読書集会開催の支援を行う。地元出版者は、図書館において直接ブックキューレーションを展開するコーナーを持つことができる。また、小規模独立書店、小規模の地元出版者のポップアップストア（書店への注文方法と本の紹介）を図書館内に設けることで、図書館利用者は、それらの事業者に出会い、本を読み、購入し、分かち合うという新しい経験を得ることができる。また、図書館利用者が書店へ足を運ぶ機会を作るために、例えば作家のトークショーを企画し、場所として書店を利用する。その場所の使用料を図書館が支出する。利用者は書店で作家と出会うことができる。図書館が出版、書店の個人事業者に直接的な経済支援をすることは難しいが、図書館の発信力と集客力を基盤に「広報」に注力し支援することにより、人々をつなげているのである。

また、作家たちへの支援として、上記のような特別な事業の他に、いくつかの図書館には館内

に常設の作家専用の執筆室を設け、安定した執筆環境を提供している。カンドン区は地理的にはソウル市内では郊外に位置するが、以上のような支援事業や読書環境整備は、出版者、作家、書店らの中心地への流出をふせぎ、地元への定着を促進する効果を持つ。

### 3.2.3 一般利用者の参加・協力

カンドン区では利用者の「才能寄付」が多く見られる。「才能寄付」とは、専門的な知識やスキルを持つ人が、その専門性を活かして無償で社会貢献活動を行うことである。図書館においては、多言語話者の図書館利用者が通訳を行う例や、カンドンソク図書館への KAIST の学生からの自発的な協力の申し出などもそれにあたる。ソンネ図書館では、司書をキャラクターデザインしアバターを作り、メタバースライブラリーのアプリが開発された事例がある。ドンチョン図書館では、利用者がペットボトルキャップを素材として自身の技術で再生キーホルダーを作成し、図書館グッズとして無償配布する事例がある。またドンチョン図書館では、館内に誰もが自分の愛読書を他者に提供できるコーナーが設置されており、メッセージ付きの寄贈本が利用者同士で交換されている。中央図書館には住民の寄贈図書コーナーが設けられている。利用者自身の積極的、自発的な図書館活動への参加は、図書館を活気づけている一面を持っていると言える。

## 3.3 暮らしの中の図書館

A チーム長は、“気軽に利用できる図書館は歩いて 10 分圏内に”と述べている。カンドン区には、区立図書館以外に「小さな図書館」「ブックカフェ図書館」等の各種の読書支援施設を各所に設けるほか、24 時間図書貸出システムの設置や、私立の「小さな図書館」との連携によって図書館網を拡充している。

また、「カンドン小さな図書館協議会」も設立されており、公立・私立のすべての「小さな図書館」が参加しているわけではないが、相互に情報交換し、新規の設立の支援などを行っている。公立の「小さな図書館」においては、住民の様々な同好会（例えばブックトーク同好会、詩に関する文芸同好会など）の場にもなっている。また、ある「小さな図書館」の絵本同好会はソンネ図書館の絵本制作プログラムと連携している。図書館密度が高く、かつ活動が活発であり、暮らしの中の身近な存在となっている。

開館日、開館時間にも配慮がなされ、全館が一斉に休館することがないので、区立図書館はすべての曜日にいずれかの図書館が開館していることになる。社会人のために、児童サービス部門を除いて夜 10 時まで開館する図書館もあり、仕事を終えてからも利用できる。さらに 24 時間対応の自動貸出・返却システムを区内の図書館の他、駅構内など 9 か所に設置している。このシステムをスマートライブラリと称し図書館サービスの届かないところを補っている。

동네서점 바로대출「町内書店即日貸出制度」は、図書館の発注から提供までの時間の短縮と、

来館の手間を省く制度である。利用者は図書館の公式サイトを通じてリクエストを送信する。申請が認められた図書は、利用者の地元書店で直接貸出し、利用後にその書店へ返却する。返却後に図書館へ納入され書店へ図書費が支払われる。図書館が無料貸本屋ではなく地元書店の利用を促し、利用者も時間を節約できるシステムである。

#### 4. 考察

様々な点で事情の異なる日本の公立の図書館に今すぐ取り入れることのできるサービスや空間デザインやプログラムには果たしてどのようなものであろうか。改めて特別な費用をかけずにできることには限界がある。

例えば、開館日・休館日について考えてみよう。公共図書館は月曜休館であることが多い。地域連携の在り方として休館日の分担をすることは可能であろうか。市内や区内で、あるいは複数の隣接自治体で地域ブロックを作り、ブロック内の図書館で休館日を分担することを提案したい。

次に新しい「場」の創出はどうであろう。カンドン区立図書館では、閲覧室、資料室、ホールなどの一般的な施設名だけでなく、「ㅁ」(場、場所、ところ), 「-ㄷ」(場所, ○○地, ○○場, 「공방」(空間)「존」(英語のゾーン)という単語や接尾語を用いて表現される利用空間が設けられている。例えば、中央図書館では閲覧室の一角に「생각ㅁ」(思考の場)を設けている。そこは空間を隔てた別室ではなく、床に境界線で「場」を示し、机、司書が選書する筆写のテーマとなる図書、筆記具とノートが置かれる。それだけである。利用者は、このスペースでお気に入りの一冊もしくは数行を自分の手で筆記したり、場面のイメージ画を描く、表紙デザインを考えてみる、感想を書くなどする。この「思考の場」では、意外なほど多くの人々が、思い思いに様々なことを書き残している。これにより、個人の癒しにもつながるが、1冊の本とノートを通じて場の共有が実現する。これは、特別な部屋を設けずとも、そのような「場」であることを示すサインとわずかな筆記用具の提供で始められるという点で取り入れてもよいサービスではなからうか。

最後に、「図書館はマルチプレイスペースである」という発想への転換はどうであろう。日本で話題となる図書館の中には、複合施設に組み込まれているケースがある。しかしその場合、図書館は図書館でしかない。対してカンドン区では、図書館はマルチプレイスペースであるという発想があり、ドンチョン図書館館長は“図書館は本のある空間でありながら、その空間の活かし方は多様であって良い。読書や勉強、資料利用にとらわれなくても良い”と語った。図書館はコミュニティの文化・芸術のための「場」であり、集まる場所であり、休む場所であり、遊ぶ場所であり、何もしない場所であることすら許容する。その一方で多様なニーズに合わせて参加可能なプログラムも用意する。そうして多様な利用を導けるよう空間をセッティングするが、図書館側は「何もしない利用」さえ想定し肯定する。個々の利用者がその場で何をするか自由である。読書しなくてもよいし、勉強しなくても良い(実際にドンチョン図書館には専用の勉強室はない)。

このように多様な利用のできる空間（場）を準備しておくことで、特別な広報を行わなくとも人は図書館に集まるといのである。

利用者に利用目的と利用方法をまかせ、それで良いのだと肯定する。そうして街の人々にとって図書館のある暮らしが当たり前になれば、本を中心にコミュニティの繋がりができる。それでこそ図書館が社会の構成要素の一部となり機能していくのではなかろうか。

## 注

- 1) 大韓民国の図書館法 도서관법 <https://law.go.kr/>
- 2) 작은 도서관 (小さな図書館)「図書館法」「小規模図書館振興法」によると一般公立図書館を補完する存在であり、地域住民に密着した生活文化空間としての役割を果たす。
- 3) 국가도서관통계시스템 国家図書館統計システム  
<https://www.libsta.go.kr/statistics/public/main> (最終確認日 2025.10.27)  
広域自治体とは最大の行政区画単位 (特別市 (ソウル特別市), 広域市, 特別自治市, 道, 特別自治道) を指す。
- 4) 강동통합도서관 도서관소개 (カンドン区立図書館統合サイト図書館図書館紹介)  
<https://www.gdlibrary.or.kr/portal/menu/30/content> (2025.10.31 最終確認)
- 5) 서울특별시 서울시등록인구(년령별, 동별)통계ソウル特別市登録人口(年齢・洞別)統計  
<https://data.seoul.go.kr/dataList/10727/S/2/datasetView.do> 数値は2025年10月23日現在
- 6)ブックカフェ図書館 カンドン区が設置する住民密着型の比較的小規模な図書館で館内にコーヒー等の自販機が設置される。
- 7) 서울특별시 강동구 문화재단 설립 및 운영에 관한 조례 (ソウル特別市カンドン区文化財団設立および運用に関する条例)により設立と運営について規定。事業内容は地域文化芸術振興のための事業開発、支援、推進。人材養成、団体の支援、地域のアートセンター、図書館の運営。  
<https://law.go.kr/ordinInfoP.do?ordinSeq=1575045>
- 8) 「責任」は職位・職責を表す肩書の一種。
- 9) 超接続 (초연결) とは、人と人, 人とモノ, モノとモノ (IoT) がネットワーク (ICT) を通じて継続的に情報をやり取りする状態。
- 10) 암서도서관, 미술특성화 프로그램, 독서문화 프로그램 (2025.10.28 最終確認)  
<https://www.gdlibrary.or.kr/as/menu/369/tmp/lctr-evnt/special/100186>  
「西洋文化の中の美術思想」『한눈에 빠져드는 미술관』の著者안용태を講師とした成人対象の全12回の講座。
- 11) この一連の活動と利用者数の増加については、2024年2月に行ったインタビューによるものである。
- 12) ブックキューレーションは司書が行う作業。展示や推薦図書のための、図書資料の選択やキャプション、ポップ、展示方法、提供などを含んでいる。
- 13) 韓国におけるエネルギー消費に配慮した建築物の認定。ZEB4等級は韓国エネルギー公団によるエネル

ギー自給率 40% 以上の建築物の認定。1<sup>+++</sup>は韓国生産性本部認証院による建物の年間単位面積当たりの一次エネルギー所要量 80 (kWh/m<sup>2</sup>・年) 未満の認定

- 14) 例えば“영어 그림책과 함께 떠나는 오감 여행”「英語の本とともに旅立つ五感の旅」英語の絵本を使いながら、目が見えない、耳が聞こえないことを想定し直感だけで物事を理解しようとする体験プログラムなどがある。

<https://www.gdlibrary.or.kr/sn/menu/135/tmp/1ctr-evnt/reading/100118>

- 15) KAIST (Korea Advanced Institute of Science and Technology) 韓国科学技術院。研究中心の高等教育を行うトップクラスの理工学分野の国立大学。

- 16) 도서문화재단 씨아図書館文化財団シア

文化体育観光部が所管する財団で実験的な図書館建築や運用を行う。また公共図書館と協働し図書館に新しい空間・コンテンツ・体験を創出、持続的運営を支援する。中央図書館の「モヤ」もこの財団のコンサルテーションを受けている。<https://see-art.org/>

## 文献表

金 容媛, 2007. 韓国の図書館関連法規の最新動向 カレントアウェアネス 293 : 4-6

村主千賀, 2019. 韓国の絵本の中の図書館. 東海学園大学研究紀要 : 人文科学編 24 : 111-120

村主千賀, 2024. 図書館内における「滞在」と「利用」. 東海学園大学研究紀要 : 人文科学編 29 : 91-102

吉村剛史, 2021. ソウル 25 区 = 東京 23 区 : 似ている区を擬えることで土地柄を徹底的に理解する. パブリブ.

곽영미, 박선희, 2016. 도서관에서 만난 해리. 숨쉬는 책공방.

김민채, 예쁜 공방들 성안로에 다 모였네! 엔젤공방거리. 내 손안에 서울 서울특별시청 2020. 2. 25 (2022. 9. 21 記事修正) (2025. 10. 28 最終確認)

<https://mediahub.seoul.go.kr/archives/1270656>

김원훈, 2023. 빨리빨리 레스토랑의 비밀. 달리.

임중빈, 숲속도서관의 끝판왕이 나타났다! ‘강동숲속도서관’ 개관. 내 손안에 서울. 서울특별시청 발행일 2025. 05. 26. (記事修正 2025. 05. 26) (2025. 10. 31 最終確認)

<https://mediahub.seoul.go.kr/archives/2014449>